
種生物学会 ニュースレター No. 32

THE SOCIETY FOR THE STUDY OF SPECIES BIOLOGY

NEWSLETTER

May, 2006

目 次

第 37 回種生物学シンポジウムの記録	1
シンポジウムを振り返る	土松隆志 3
総会の記録	5
庶務報告	5
会計報告	5
英文誌編集委員会報告	6
和文誌編集委員会報告	6
2005 年決算・2006 年予算	7
種生物学会会則	8
自然史学会連合総会記録	9
日本分類学会連合総会記録	10
会費納入のお願い	11
会員異動	12

第 37 回種生物学シンポジウムの記録

2005 年 12 月 16 日) ~ 18 日, 八王子セミナーハウスにて開催, 参加者: 125 名
プレシンポ「昆虫が操作する植物のかたち」

深津武馬 (産総研)

シンポジウム 1 「種子の発芽タイミングを決める進化・生態・生理・分子機構」

オーガナイザー 吉岡俊人・清和研二 (東北大学大学院農学研究科)

リードトーク 清和研二・吉岡俊人

- 1) 本田裕紀郎 (東京大学大学院農学生命科学研究科)
- 2) 小山浩正 (山形大学大学院農学研究科)
- 3) 清和研二 (東北大学大学院農学研究科)
- 4) 川上直人 (明治大学農学部)
- 5) 山口信次郎 (理研植物科学研究センター)
- 6) 豊増知伸 (山形大学大学院農学研究科)
- 7) 南原英司 (理研植物科学研究センター)
- 8) 中園幹生 (東京大学大学院農学研究科)

シンポジウム 2 「適応進化学の新しい時代を拓く: 生態学・遺伝学・ゲノム学の融合」

オーガナイザー: 森長真一 (東北大)・土松隆志 (東大)

コメンテーター: 田中嘉成 (中央大)

- 1) 清水健太郎 (ノースカロライナ州立大)
- 2) 工藤洋 (神戸大)
- 3) 遠藤俊徳 (北海道大)
- 4) 高橋亮 (理研 GSC)
- 5) 村井耕二 (福井県立大)
- 6) 津村義彦 (森林総研)

ポスター発表の記録

- P-1 サイズ依存死亡率や成長率を滑らかに推定する
島谷健一郎 (統計数理研究所)・河原崎里子 (成蹊大学)・真鍋徹 (北九州博物館)
- P-2 ヤマユリの種子発芽習性
鈴木貢次郎 (東京農業大・地域環境科学部)
- P-3 越夏環境の違いによるネズミムギの出芽時期の差異
市原実・渡邊則子・山下雅幸・澤田均 (静岡大・農)・木田揚一 (静岡県農試)・浅井元朗 (中央農研)
- P-4 八甲田山の亜高山帯下部におけるアオモリトドマツ林冠木の樹冠拡大について
関剛 (森林総研・東北・森林生態)
- P-5 林冠落下物による局所的攪乱に対するクローナル低木 *Asimina triloba* の回復機構
穂坂尚美 (東京都立大・院・理学)
- P-6 シデコブシ集団の遺伝的多様性は集団サイズと孤立の程度によって説明されるのか?
玉木一郎・鈴木節子・戸丸信弘 (名大・院・生命農学)
- P-7 絶滅危惧植物ユキモチソウ *Arisaema sikokianum* の性転換はサイズ依存的に決まっているのか?
浦川裕香 (香川大・農)
- P-8 植物は昆虫食害に応答して葉のトライコーム密度を可塑的に増加させる
～シロイヌナズナ発生遺伝学による解析～
吉田祐樹 (京都大・生態学研究センター)
- P-9 母樹からの距離と発芽タイミングが実生の生存に及ぼす影響
山崎実希・清和研二 (東北大・院・農学)
- P-10 地域固有性の保全を目的とした宮城県内におけるブナ天然林の分子系統地理学的解析
菅野学・陶山佳久 (東北大・院・農学)・原正利 (千葉中央博)・高橋誠・渡邊敦史 (林木育種センター)
・清和研二 (東北大・院・農学)
- P-11 分断された林床草本個体群のデモグラフィー：推移行列モデルによる解析
富松裕 (首都大・生命環境科学)
- P-12 QTL 情報に基づく遺伝子浸透の解析：栽培アズキと野生アズキの総種子重に関わる QTL の挙動を例に
北本尚子 (筑波大・生命環境)・伊勢村武久・加賀秋人・黒田洋輔 (生物研)
・大澤良 (筑波大・生命環境)
- P-13 タマバエの虫えいに寄生する種を含むクロツヤサルゾウムシ属の分類学的研究
(昆虫綱：コウチュウ目：ゾウムシ科)
吉武啓 (東京大・院・総合文化・広域システム)
- P-14 ミヤコグサ野生系統間にみられる成長特性の変異
中田望 (東京都立大・院)・可知直毅 (首都大)
- P-15 新大陸産マメゾウムシ科昆虫の寄主利用パターンと寄主植物の莢裂開パターンについて
加藤俊英 (東京大・院・総合文化・広域システム)
- P-16 地球規模生物多様性情報機構 (GBIF) 日本ノード活動
菅原秀明 (遺伝研・生命情報・DDBJ)・伊藤元己 (東京大・院・総合文化・広域システム)
・松浦啓一 (国立科学博物館・動物研究部)
-

シンポジウムを振り返る：はじめてのオーガナイズ

土松 隆志 (東大・総合文化・広域システム)

12月の八王子セミナーハウスがこんなにも寒いところだとは、私は想像だにしていなかった。とある先生をこのシンポにお誘いしたときも、「あそこは冬に行くところではない(から乗り気しないな)」などと言われていたのを今更になって思い出す。昔から種生物シンポはこの地で行われてきたと聞く。随分と辺鄙で寒々しい山の上で続けてきたものだと思いつつ、私は、種生物学会シンポジウム「適応進化の新しい時代を拓く：生態学・遺伝学・ゲノム学の融合」のオーガナイザーとしてシンポのイントロダクションの講演を始めた。

思えば、オーガナイズの誘いを受けたのは2005年の3月頃のことである。大阪の生態学会の折、森長真一さん(東北大)が種生物学会会長である伊藤元己さん(東大)からオーガナイズの誘いを受け、さらに森長さんから私へと誘ってくださったという経緯で、私は森長さんと組んでシンポのオーガナイザーを務めさせていただくことになった。当時学部生だった私にとって、博士課程の院生として活躍される森長さんは私が一番に尊敬し、また憧れる研究者であった。そんな方と組ませていただいていたシンポのオーガナイズだなんて、私には願ったりの機会である。私にオーガナイズなんてできるものだろうかという不安はもちろんあったが、伊藤元己さんや矢原徹一さん(九州大)に「自分が話を聴きたい人を呼んでくれればいだけだよ」と言われ、なるほどそういうものかと、軽い気持ちで誘いを快諾したのであった。

しかし、シンポのオーガナイズ初体験であった森長さんと私は、その後シンポを企画することの難しさを早くも実感することになる。生態学者が古くから興味を抱いてきた適応進化という現象に分子遺伝学・ゲノミクスの見地から切り込むシンポにしたい、という大まかなコンセプトはあったものの、ではどんな分野のどんな研究者をどのような配分で選ぶかというシンポの構成などで我々は悩み、メールで日々議論を重ねた。時には「我々は何が知りたいのか」と自分達自身の根本の問題意識まで掘り下げ、その上でどんな人を演者に呼ぶのがよいのかと考えたりもした。熟慮の末に演者候補を決定し、講演を依頼して、シンポの大枠が決まったのは秋口。初めてのシンポで慣れぬことばかりで、その後も演者の方々には様々にご迷惑をおかけすることとなるものの、どうにかこうにかシンポ当日を迎えることができた。

果たしてシンポジウムが「成功」だったのかどうか、未だに私はよくわからない。しかし言えることは、選りすぐりの一流研究者のお話を聴くことができたということだ。演者の人選は大当たりだったと確信している。ここで一通り、その選りすぐりの6人(+コメンテータ)の講演内容を簡単に振り返ってみたい。

トップバッターは清水健太郎さん(ノースカロライナ州立大)。シロイヌナズナにおける自殖の進化に関する話、タネツケバナにおける倍数化進化の話をしていただいた。今や、日本における進化・生態ゲノミクスの旗手と言ってよい人だろう。2番手は津村義彦さん(森林総合研究所)。EST由来のマーカーを用い、Fstを指標にしてゲノムワイドに適応的な遺伝子を探索するというお話であった。スギ・ヒノキという、遺伝学的には大変困難な材料に真正面から挑まれていて感激した。午前の最後は遠藤俊徳さん(北海道大学)。標準化系統樹、アミノ酸配列置換モデルを通して、正の自然淘汰に関するお話をいただいた。シロイヌナズナ等の近縁種を用いて系統樹の枝の浅いところで適応の研究を進めようという流れと同時に、遠藤さんに話していただいたような、もっと枝の深い、被子植物の起源などにもあったに違いない正の自然淘汰を伴う分子進化(=適応進化)を知る試みも非常に重要だ、と感じた。昼食後は村井耕二さん(福井県立大)。コムギ・イネなど単子葉植物での開花調節の仕組みの研究を通し、シロイヌナズナの系と比較することで、開花のメカニズムの多様性と普遍性に答えようとされていた。進化の研究者ではなくあくまで農学・育種遺伝の方なので、このシンポには「直接」関わるわけではないが、聴衆の方々は大いに進化学的な示唆を受けられたのではないかと感じた。5番目は生態学の側から工藤洋さん(神戸大)。シロイヌナズナ野生近縁種を用いた表現型可塑性の適応進化研究を、今後の展望も含めお話いただいた。表現型可塑性の遺伝的背景はまだまだ解明されていない未知の領域であり、今後が楽しみだと感じた。ラストは高橋亮さん(理化学研究所)。適応幾何学という理論的見地から遺伝子の突然変異と表現型進化の関係について説明された後で、Bradshaw and Schemskeの*Mimulus*のデータが適応幾何学の観点からどれだけインパクトのあるものだったのか

というお話をされた。シンポ全体をまとめ上げるような発表をしていただき、オーガナイザーとして多いに助けられた。田中嘉成さん（中央大学）にコメントをお願した。ご専門の、多面発現と遺伝相関のお話をレビューしていただけた。

その後は総合討論である。農学、遺伝学、分子進化学、ゲノミクス、そして生態学と様々な分野の研究者が一同に会し、今後の新しい研究の可能性についてディスカッションできたらという思いで、50分と長い時間をこの討論にあてていた。討論では、過去に起こった進化的イベントの因果関係にどうやって迫っていけばよいのかという点がひとつのトピックとなった。分子進化学・分子集団遺伝学の理論が整備されつつある現在でも、塩基配列データから過去の正の自然選択を精度よく検出することはなかなか難しいこととされている。そういう状況で、過去の自然選択における因果関係はどうやって探っていけばよいのか、というわけである。様々に意見は出たがしかし、最後に矢原徹一さんが「様々な遺伝学的手法が使えるようになったことで初めてできるようになったことがたくさんある。過去の因果というのも重要だが、あまり深刻に難しく考えずとも、現時点でやれる実験はいくらでもあるだろう」といった旨を述べられ、議論をまとめられた。

議論の内容はさておき、総合討論はオーガナイザーの舵取り役としての腕がもっとも試されるところであったはずだ。しかし実際には、様々な分野の講演をまとめていくような討論を切り盛りすることは思った以上に難しいことであり、未熟な私には正直手に負えなかった。結果として、高橋

亮さん・清水健太郎さんをはじめとした講演者、矢原徹一さんら聴衆の方々に大いに助けられ無事終わることになるものの、これではオーガナイザー失格である。今後の課題として心にとどめたい。

以上、オーガナイズを依頼されてから、準備し実行に移すまでの過程を振り返ってみた。いくつもの至らぬ点はある反省するところが多いが、私自身の得るところは大変大きかった。シンポの企画をすることは、様々な研究者と知り合え、最新の研究動向を知ることができると共に、先行研究を自分の中で体系的にまとめなおすよい機会になると感じた。そしてそれは何より、自分自身のモチベーションや研究意識を再確認することにも繋がるのである。そういった意味で、同年代の若い大学院生の方々も、ぜひ一度学会シンポのオーガナイズに携わることをお勧めしたい。自分の研究内容を発表したり人の研究内容を聴いたりするのはまた違う学会との関わりによって、自分の中での新しい研究への視座が開けるように思う。この文章がそういった同年代の方々の刺激になれば幸いだ。

最後に、ご講演いただいた演者の方々、最初に話を持ちかけてくださった伊藤元己さん、共にオーガナイズに関わってくださった森長真一さん、ディスカッションでシンポを盛り上げてくださった矢原徹一さん、深津武馬さん（産総研）、嶋田正和さん（東大）をはじめ、シンポに来てくださった皆様に篤くお礼申し上げたい。

日本分類学会連合ニュースレターの入手

種生物学会が加盟している日本分類学会連合のニュースレター（19号まで発行済み）の入手方法をご案内します。電子媒体による発行なので、下記URLからダウンロードを行ってください。

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsps/letter/newsletter.htm>

■報告

1. 英文誌 Vol. 20 (1-3) を発行
2. 和文誌編 (28号「草木を見つめる科学」) を発行
3. ニュースレター 30 & 31 を発行
4. 雑誌・著作権関連
 - ・国立情報学研究所電子図書館への参加
 - ・学術著作権協会との ILL 契約を一部変更
5. 日本学術会議に学術協力団体として登録
6. 京都賞ワークショップ (11月12日開催) を協賛
7. 自然史学会連合講演会 (11月20日開催) に出展
8. 決算報告

■議題

1. 来年度事業
 - ・英文誌 Vol. 21 (1-3) の発行
 - ・和文誌 (29 & 30号) 発行
 - ・ニュースレター 32 & 33 の発行
 - ・シンポジウムの開催 (京都方面を予定)
 - ・学会賞の新設 (委員会を設置して詳細を検討)
 - ・故鈴木和雄氏の別刷り配布
2. 来年度予算案
3. 会則の改正

■2006年度役員 (任期は2006年12月31日まで)

会 長	伊藤元巳
副 会 長	可知直毅
会 計	渡邊幹男
庶 務	藤井伸二
ホームページ担当委員	芝池博幸
地 区 幹 事	
北 海 道	高田壮則
東 北	平塚 明
	吉岡俊人
関 東	堀 良道
	綿野泰行
	芝池博幸
中 部	川窪伸光
	渡邊幹男
近 畿	工藤 洋
	加藤 真
	高須英樹
中国・四国	井鷲裕司
	國井秀伸
九州・沖縄	西脇亜也
英文誌編集委員長	原 登志彦
和文誌編集委員長	西脇亜也

2005年度庶務報告

ニュースレターの編集・発行、電子図書館サービスへの加入、学会出版物の著作権関連の契約、学術協力団体への登録、京都賞ワークショップへの協賛、自然史学会連合講演会への出展、自然史学会連合総会・分類学会連合総会への出席等を行った。電子図書館サービスは2006年4月に新システム (CiNii) への移行が予定されている。具体的なサービスについては今後のニュースレター誌上で紹介する予定。(庶務 藤井伸二)

2005年会計報告

会計の職務を引き継いで2年が経過しました。任期最後の本年もよろしく申し上げます。現在、本学会の運営状態は会員各位の協力により、2005年に赤字財政を脱却し、黒字運営になりました。今後も会費の納入を前年末までに行われるようよろしく申し上げます。しかし、まだ100名近くの方の会費が未納状態です。2006年の会費は一般会

員12,000円、学生会員6,000円です。未納金のある会員の方には、宛先ラベルの右下に未納金額が数字で示してあります。お急ぎお振り込みいただきますようお願い申し上げます。なお2006年より、会費の納入は郵便振替のみにてお願いします。

最後に、2005年の会計監査は2006年1月17日、大阪学院大学にて林一彦 (大阪学院大学)・岡崎純子 (大阪教育大学) の2名をお願いし行いました。

(会計 渡邊幹男)

庶務日誌

2005年10月 ニュースレター31発行。京都賞ワークショップのチラシを同封。

11月20日 自然史学会連合講演会に出展、学会誌販売

12月10日 自然史学会連合総会に出席

2006年1月7日 分類学会連合総会に出席

3月 国際シンポ「力学系理論と生物学・環境科学への応用」(2007年3月14～17日開催予定)の後援

(庶務 藤井伸二)

英文誌編集委員会報告

英文誌編集委員長 原 登志彦

Plant Species Biology の2005年1月から12月までの編集状況を報告します。この間の受理論文総数は35編でした。内訳は、日本から14編、インドから4編、アメリカから3編、中国から2編、オーストラリアから2編、ドイツから2編、ブラジルから2編、アルゼンチン、ヨルダン、トルコ、イタリア、スペイン、マーシャル諸島から各1編でした。以上の受理論文のうち6編が却下、14編が印刷（2005年、vol. 20, no. 3; 2006年、vol. 21, no. 1）され、15編が審査中です。2005年のvol. 20 は3号（4月号、8月号、12月号）すべて予定通り発行され、すでに皆様のお手元にお届けしました。Vol. 20では、original articleが14編、notes and commentsが2編、Life History Monographs of Japanese Plantsが4編、そしてPlant Species Biologyの編集部が中心となって企画した種生物国際シンポジウム「植物の繁殖様式の多様性：生態、進化そして環境保全 Diversity of Reproductive Systems in Plants: Ecology, Evolution and Conservation」（2003年10月16日（木）～17日（金）、札幌コンベンションセンター）の招待講演からinvited articleが3編掲載されま

した（残りの招待講演については順次invited articleとして掲載予定です）。合計23編が2005年のvol. 20に掲載されたこととなります。そのうち14編が日本から、9編が海外からの投稿論文でした。2006年のvol. 21, no. 1（4月号）は、予定通りすでに皆様のお手元に届いたことと思います。また現在、Citation IndexにPlant Species Biologyを登録すべく申請書を提出したところです。その登録の重要な条件に雑誌が定期的に刊行されることがあります。2003年、2004年に引き続き、2005年もその条件をクリアできたこととなります。今後も定期的にPlant Species Biologyを刊行すべく努力いたしますが、多くの会員の皆様からの投稿も必要不可欠ですので、よろしくお願いいたします。

2005年からは、従来どおりの郵送による投稿に加えて、電子メールによる投稿も受け付けることになりました。このことにより、編集部と著者とのやり取りやレフェリーとのやり取りも電子メールで行えることになり、審査の過程と出版までの時間を大幅に短縮できるのではないかと期待しております。また、投稿される皆様にとっても、より投稿しやすくなると思いますので、今後ともより多くの投稿をお願いしたいと思っております。

和文誌編集委員会報告

和文誌編集委員長 西脇亜也

1. 和文誌編集の現状

種生物学研究 第29号「森林の生態学」が2006年3月20日に出版されました。責任編集者の正木隆さん、田中 浩さん、柴田銃江さんら関係各位による労作です。出版直後の生態学会と林学会でも売れ行きは好調で、出版直後だと言うのにすでに重版準備に入りました。さらに宣伝したいと思いますので会員の方々はお近くの本屋さん（生協など）に種生物学シリーズの本を置いていただくようお願いしていただくと幸いです。

特に既刊である種生物学研究 第28号「「草木を見つめる科学 植物の生活史研究」は2005年3月16日に出版されましたが、残念ながら売れ行きはあまり良くありません。今後は広く読んでいただきたいので会員の方々のご協力をいただきたいと思います。種生物学研究 第26/27号「光と水と植物のかたち」の出版から3年弱が経過しましたが売上げは好調です。「花生態学の最前線」は、

2003年11月末に重版となり、「森の分子生態学」は2004年夏に再重版となっています。また、「保全と復元の生物学」も重版となる見込みで、この5冊の種生物学シリーズは好調です。

また、第30号「雑草の進化生態学（仮）」は、2005年度中に第29号として出版予定でしたが、遅れておりまして新しい予定では2006年度中に出版予定で、芝池さん、浅井さんらの責任編集で編集が進められています。第31号「共進化の生態学（仮）」は2007年始めに出版予定で、横山潤さんの責任編集で編集が進められています。

2. 次の和文誌出版企画のシンポジウム

2006年12月予定の種生物学シンポジウムでの和文誌出版企画のシンポジウムについては未定です。次の企画が単行本化10冊目だと言うこともあり、なかなか決まりにくいのも事実です。会員のみならず、これはと思う企画案を募集したいと思いますのでよろしくお願いいたします。

和文誌編集委員会の活動は順調ですが、今後も出版遅延が生じないように努力したいと思います。

種生物学会 2005 年決算報告 (2005 年 1 月 1 日 - 2005 年 12 月 31 日)

収入の部		2005 年	2005 年	支出の部		2005 年	2005 年
項	目	収	入	項	目	支	出
		入	予			出	予
		入	算			出	算
		額	額			額	額
会費		6,424,000	8,239,000	印刷費		107,100	160,000
(05 年分)		4,819,000**	4,998,000	Newsletter (30,31)		107,100	160,000
(06 年分)		1,605,000**	0	出版委託費		4,509,455	6,100,000
海外一般		0	50,000	2004 年 (PSB 19)		1,575,840	1,500,000
滞納分**		0	3,191,000	2005 年 (PSB 20)		2,476,680	3,800,000
購読料		204,000	200,000	04 年 (28 号) 和文誌出版費		456,935	400,000
バックナンバー		61,500	100,000	05 年 (29 号) 和文誌出版費		0	400,000
学術協会著作権		39,501	35,000	発送費		113,210	300,000
Royalty		308,127	200,000	Newsletter (30,31) 郵送費		113,210	90,000
超過ページ代		337,000	150,000	04 年 (28 号) 和文誌郵送費		0	105,000
その他		13**	50,100**	05 年 (29 号) 和文誌郵送費		0	105,000
				事務費		523,295	550,000
				和文誌編集		0	100,000
				英文誌編集		0	150,000
				その他		523,295	300,000
				和文誌編集補助		75,000	0
				英文誌編集補助		250,000	250,000
				シンポジウム補助金		0	100,000
				自然史学会連合分担金		20,000	20,000
				日本分類学会連合分担金		10,000	10,000
				会計監査交通費		13,000	3,000
				学会費		0	100,000
小計		7,374,141	8,974,100	小計		5,621,060	7,593,000
前年度繰越金		1,936,624	1,936,624	次年度繰越金		3,689,705	3,317,724
合計		9,310,765	10,910,724	合計		9,310,765	10,910,724

一般会員:351名(-31名), 学生会員:46名(0名), 海外会員:33名, 国内機関購読:16名(-5名), 計450名(-32名)

**2005年まで **2006年以降 **2005年まで **利子等

種生物学会 2006 年予算案 (2006 年 1 月 1 日 - 2006 年 12 月 31 日)

収入の部		2006 年	2005 年	支出の部		2006 年	2005 年
項	目	収	入	項	目	支	出
		入	予			出	予
		算	算			算	算
		額	額			額	額
会費		3,889,000	6,424,000	印刷費		150,000	107,100
(05 年分)		560,000**	4,819,000**	Newsletter (30,31)		0	107,100
(06 年分)		3,279,000**	1,605,000**	Newsletter (32,33)		150,000	0
海外一般		50,000	0	出版委託費		6,300,000	4,509,455
滞納分**		0	0	2004 年 (PSB 19)		0	1,575,840
購読料		192,000	204,000	2005 年 (PSB 20)		1,500,000	2,476,680
バックナンバー		100,000	61,500	2006 年 (PSB 21)		4,000,000	0
学術協会著作権		50,000	39,501	04 年 (28 号) 和文誌出版費		0	456,935
Royalty		200,000	308,127	05 年 (29 号) 和文誌出版費		400,000	0
超過ページ代		200,000	337,000	06 年 (30 号) 和文誌出版費		400,000	0
その他		10,000**	13**	発送費		100,000	113,210
				Newsletter (30,31) 郵送費		0	113,210
				Newsletter (32,33) 郵送費		100,000	0
				事務費		500,000	523,295
				和文誌編集		50,000	0
				英文誌編集		50,000	0
				その他		400,000	523,295
				和文誌編集補助		50,000	75,000
				英文誌編集補助		250,000	250,000
				シンポジウム補助金		100,000	0
				自然史学会連合分担金		20,000	20,000
				日本分類学会連合分担金		10,000	10,000
				会計監査交通費		15,000	13,000
				学会費		100,000	0
				学会選挙費用		50,000	0
小計		4,641,000	7,374,141	小計		7,645,000	5,621,060
前年度繰越金		3,689,705	1,936,624	次年度繰越金		685,705	3,689,705
合計		8,330,705	9,310,765	合計		8,330,705	9,310,765

**2005年まで **2006年以降 **2005年まで **利子等

種生物学会 会則

1. (名称)

本会は種生物学会 (The Society for the Study of Species Biology) という。

2. (目的)

本会は植物の種生物学・進化生物学研究の発展・向上を図ることを目的とする。

3. (会員)

本会の趣旨に賛同し、会費を納入した者は会員となる。本会の会員は一般会員、学生会員、団体会員の3種類とする。

4. (事業)

本会は以下の事業を行なう。

- 1) 種生物学シンポジウムの開催。
- 2) 学会誌 (英文誌・和文誌) およびその他の定期・不定期出版物の刊行。
- 3) 本会の目的達成に必要なその他の事業。

5. (財政)

会費・事業収入・寄付金をもって会の運営にあたる。

6. (総会)

- 1) 本会の議決機関は総会である。総会は年1回開催する。
- 2) 総会の議決は出席会員の過半数以上の賛成をもって行なう。
- 3) 臨時総会は、会長が必要と認めるときあるいは会員の1/3以上からの請求があったときに開催する。

7. (会長)

- 1) 会長は本会を代表し会務を統べる。会長は別に定める附則に従った選挙によって選ぶ。会長の任期は3年とし、1月1日にはじまり12月31日に終わる。再選はこれを認めない。
- 2) 会長は必要に応じて特定の事項を審議する委員会を設けることができる。
- 3) 会長は必要に応じて特定の事項を担当する委員を委嘱することができる。

8. (副会長)

会長を補佐し、会務を円滑に進めるために副会長1名をおく。副会長は別に定める附則に従った選挙によって選ぶ。任期は3年とし、1月1日にはじまり12月31日に終わる。副会長は次期会長の候補者とする。

9. (幹事会)

- 1) 幹事会は会長・副会長・庶務・会計・編集委員長と14名の幹事で構成され、会の運営を行なう。庶務と会計については10. によって定める。幹事は別に定める附則に従った選挙によって選ぶ。幹事の任期は3年とし、1月1日にはじまり12月31日に終わる。連続3選を認めない。
- 2) 幹事会は以下の事項を総会に提案・報告し、議決または承認を得る。
 - a) 会の予算提案および決算報告
 - b) 会の事業提案および報告
 - c) 会則の改正提案
 - d) その他本会の目的や事業および運営に関係すること
- 3) 種生物学シンポジウムの開催にあたって、幹事会はその運営委員を委嘱する。
- 4) 幹事会は、会長の諮問に応じて会務の重要事項を審議する。
- 5) 幹事会は、会長が必要と認めるときまたは幹事の3分の1以上からの請求があったときに開催する。

10. (庶務・会計)

- 1) 会長は庶務と会計各1名を委嘱し、総会に報告する。その任期は3年とし、1月1日にはじまり12月31日に終わる。
- 2) 庶務は本会の庶務業務とニューズレターの編集発行

を担当し、会計は本会の会計業務と会員名簿の管理を担当する。

- 3) 本会の会計年度および事業年度は1月1日にはじまり12月31日に終わる。

11. (編集委員会)

- 1) 英文誌と和文誌の各編集委員会をおく。
- 2) 各編集委員会は編集委員で構成する。編集委員会は編集委員長を互選する。
- 3) 編集委員は前任の編集委員の協議によって選出し会長が委嘱する。編集委員の任期は3年とし、1月1日にはじまり12月31日に終わる。重任はこれを妨げない。

12. (会計監査)

- 1) 本会は2名の会計監査委員をおく。会計監査委員の任期は3年とし、1月1日にはじまり12月31日に終わる。但し重任を妨げない。
- 2) 幹事会は会計監査委員候補を選出し総会に提案することができる。会計監査委員の選出は総会出席会員の過半数の承認をもって行なう。
- 3) 会計監査委員は本会の財産管理と会計業務を監査し、総会に報告する。

13. (会員の除名)

会員が次のいずれかに該当するときは、会長は幹事会の承認を経てその会員を除名することができる。

- 1) 会費の滞納
- 2) 会の目的に反する行為や会の名誉を傷つける行為のあった場合。

附則

会員の会費は前納とする。会費年額は総会で議決する。

選挙に関する附則

幹事会選制の導入に際し、以下の附則を定める。

1) 選挙管理委員会

選挙は幹事会が選出した選挙管理委員会 (3名) のもとで行なわれる。開票は選挙管理委員会が委嘱した立ち会い人のもとで行なう。また会員は開票に立ち会うことができる。

2) 会長・副会長選挙

会長・副会長は会員の投票による選挙で選ばれる。選挙では全会員が会長・副会長の被選挙権を有する。また、幹事会は会長・副会長候補として、4名以内の会員を推薦することができる。投票は単記無記名とする。得票が同数の場合は年少者を優先する。

3) 幹事選挙

幹事は当該地域の会員の投票による選挙によって選ばれる。選挙は以下の地域別に割り当てられた定員数にしたがい、定員1名区では単記無記名、複数名区では地区定員数の連記無記名によって行う。得票が同数の場合は年少者を優先する。地区定員は、北海道1 東北2 関東3 中部2 近畿3 中国四国2 九州1 (計14名) とする。

4) その他

幹事会は選挙の円滑な実施につとめる。

- | | |
|-------------|----------------------------------|
| 1987年 2月 8日 | 研究会から学会への組織変更のための会則改正 |
| 1989年 2月11日 | 幹事・庶務・会計・編集委員に関する改正 |
| 1992年 1月25日 | 幹事選挙制導入のための附則追加・改正 |
| 2004年12月11日 | 臨時総会・会員の除名に関する追加およびその他の改正 |
| 2005年12月17日 | 役員任期、事業年度、会長の職務およびその他に関する追加および改正 |

2005年度自然史学会連合総会議事録

日時：2005年12月10日（土）13：30-16:30

会場：国立科学博物館自然史研修館4階講堂

出席学会（出席者）：種生物学会（藤井）、植生学会（石田）、遺伝学会（館野）、貝類学会（上島）、魚類学会（篠原）、菌学会（出川）、蜘蛛学会（小野）、古生物学会（甲能）、昆虫学会（清水）、昆虫分類学会（友国）、植物学会（山田）、植物分類学会（西田）、進化学会（上島）、人類学会（海部）、蘚苔類学会（神田）、第四紀学会（水野）、地質学会（森田）、鳥学会（上田）地理学会（岩田）、動物分類学会（藤田）、ベントス学会（仲間）、陸水学会（伴）、生物地理学会（森中）、他1名（代表指名運営委員：佐々木）

<報告事項>

1. 出席団体数：23団体と6団体の委任状により計29団体（規定数37団体数の3分の2以上）の出席が確認され、総会が成立した。
2. 運営委員会・意見書：17年度は4回の運営委員会を開催し、会議内容の概要を説明した。学術会議の「理科離れ問題特別委員会」と環境省「外来生物法」に連合から意見書を提出した。
3. 講演会の開催：2005年11月20日に大阪市立自然史博物館において平成17年度自然史学会連合講演会「科学への入口“自然史”—第一線の専門家が語る10のとびら—」を開催した。大阪市立自然史博物館・西日本自然史博物館ネットワークとの共催で行われ、参加者数が210名に達した。その他概要について説明した。
4. 博物館部会：博物館部会は神奈川、茨城、千葉、東大、大阪、琵琶湖、兵庫より10名の代表を選出して部会を組織しているが、今年度は時間の関係で会合をもつことができなかった。
5. ホームページ：維持管理は2002年から月2万円で業務委託を行い、今年度も連合の活動報告、加盟学協会の行事の広報、エッセイ、ギャラリーの記事を掲載した。
6. 自然史教育展開プログラム：自然史研究・教育の活性化のために、優秀な研究者を地域博物館、学校の教育強化派遣し実習を行う方針であったが、昨年度総会から懸案であった適切な開催場所や方法を見つけられず、実施できなかった。
7. 加盟学会からの報告事項：特になし。

<審議事項>

1. 2004年度会計決算の承認：今回は会計（伊藤）が欠席のため、庶務（篠原）が代理で会計報告を行った。2004年4月1日-2005年3月31日の決算案が示され、質疑応答後に承認された。シンポジウム開催費（印刷費、演者謝金旅費、ポスター印刷および郵送費）、ホームページ維持管理費および事務経費の詳細が説明され、次のような質疑があった。(1)事務経費には、代表および運営委員の旅費が含まれているが、旅費と事務経費を独立に計上すべき。(2)分担金の収入が合計金額の提示のみでは明確ではないため、分担金を納入した学会の明細を示すべき。(3)収入の予算案と決算が一致していない点を用語を工夫して明確にすべき。これらの意見を受け、来年度から改善することにした。
2. 監査報告：会計監査より決算が適切に処理されていることが報告された。会計監査2名が欠席のため、書面での報告を議長が読み上げ、承認された。
3. 2005年度会計経過報告：2005年度の会計経過が報告され承認された。2005年度連合講演会の要旨集印刷代が未払いであること、2003年度通信費が未処理であったため、今年度会計で処理したことなどが説明された。分担金未納の団体が複数あることが示され、会計より督促を行うことを報告した。
4. 2006年度予算案：2006年度の暫定予算案が示され、承認された。
5. 連合ホームページの運営：現状の業務委託費が高すぎるのではとの質問を受け、その根拠を説明した。契約では月10回更新（1回当たり2千円）であるが、今年度の更新の頻度は月1回程度と低く、現状では高い金額を払っている傾向にあることを運営委員会から報告した。また年間を通してこれ以下金額での契約は困難であることを説明し、ホームページの適切な維持運営については運営委員会で検討することにした。
6. 2006-2007年度代表選挙：加盟学協会と運営委員会から池谷仙之、斎藤靖二、西田治文の3氏の推薦があった。選挙の結果、西田氏11票、斎藤氏9票、池谷氏3票で西田氏が次期代表に選出された。
7. 2006-2007運営委員候補：森田・上田・野村・篠原・海部・出川・山田の各運営員候補者が現運営委員会より紹介された。科博に所

属する候補の比率が高すぎるとの指摘をうけ、代表が追加指名する3名程度の委員を科博に集中させないことで了承された。

8. 学会施設使用料について：学会施設使用料に関する意見書案について説明があった。賛同学協会や具体的事例について情報提供をお願いした。

討論会「自然史学会連合の意義とその未来」(15:10-16:30)を行った。尾本恵市氏(連合顧問)と黒岩常祥氏(学術会議会員)からそれぞれ連合の歴史や設立目的、学術会議の現状や対外報告書の効力などについてお話を伺い、社会の中における自然史研究の現状や連合の方向性について議論を行った。また科博の事務局機能の充実について意見がだされた。

日本分類学会連合第5回総会議事録

日時：2006年1月7日(土) 10:30-12:15

会場：国立科学博物館分館

<報告事項>

(1) 庶務(佐々木)：2005年の主要な活動は、第4回シンポジウムの開催、ニュースレターの発行、タイプ標本データベースの更新、国際動物命名規約日本語版の増刷である。

(2) ニュースレター(柁原)：ニュースレター7号を6月8日に、8号を11月15日に発行した。主に加盟学会紹介の記事を掲載した。

(3) ホームページ(朝川)：ニュースレター7号、8号、およびシンポジウム要旨集のPDF版・Web版を公開した。

(4) 日本産生物種数調査(柁原)：新しく追加された調査結果はなかった。

(5) データベース(伊藤)：タイプ標本データベース(Jtypes)作成のための科学研究費補助金(研究成果公開促進費)を3団体に配分した。

(6) メーリングリスト(三中)：2006年1月1日の時点でTaxaの会員は754名である。前回の総会以降76名増加した。

(7) 国際動物命名規約日本語版(友国)：国際動物命名規約日本語版の増刷を行い、1部2800円で頒布中である。増刷にあたり、規約の改正と日本語版の訂正を追加し、追補版として発行した。追補版で追加された2ページ分は連合のホームページからダウンロードできる。

<審議事項>

(1) 2006-2007年度新役員の選出

新役員案が提出され、了承された。新たに「出版」担当の幹事を設けることになった。新役員は下記の通り。

代表：原 慶明，副代表：松井正文，庶務：佐々木猛智，会計：川田伸一郎，データベース：伊藤元己，ウェブ：山田敏弘，ニュースレター：柁原 宏，メーリングリスト：三中信宏，出版：友国雅章，監査：平野義明・益山樹生

(2) 2005年度決算・会計監査

2005年度(2005年1月1日～12月31日)の一般会計決算案、特別開会(国際動物命名規約日本語版)決算案が示された。一般会計の収入は、分担金\270,000，利息\7，広告料\60,000，前年度繰越金\996,675，合計\1,326,682である。支出は、シンポジウム開催費\116,279，特別会計への移算\27,2088，来年度繰越金\938,315，合計\1,326,682である。特別会計は\57,757の赤字であるが、今後国際動物命名規約日本語版の頒布により回収できる見込みである。会計監査員より、予算が適正に執行されていることを確認したとの報告があり、2005年度決算は承認された。

(3) 2006年度事業計画

a) 2007年1月のシンポジウム：シンポジウムの案として、博物館関係および教育関係の開催案が提案された。

博物館関係のテーマでは、地方博物館が分類学において果たしてきた役割にスポットをあて、連合が評価すべきとの意見が出された。例えば、博物館について文部科学省、学術審議会に意見書を提出することも考えられる。博物館に関連する問題は自然史学会連合でも取り組んでおり、今後協力して進めることになった。

教育関係では、高校における生物教育の問題点が指摘され、分類学の教育に関するシンポジウムおよびワークショップの開催が提案された。例えば、日本進化学会では既に教育問題について早くから取り組んでおり、その先例が参考になる。また、生物教育学会との連携してシンポジウムを開催する案も検討することになった。

さらに、高校生および大学生を対象とした「学校」を開催する案も提案された。しかし、「学校」が連合の取り組むべき事業であるかどうかという点について合意が得られず、開催は見送られた。

b) ニュースレター：連載を続けてきた加盟学会紹介の記事が終了する。今後は加盟学会の動向紹介の記事を連載することになった。

c) ホームページ：ホームページには、事務連絡、各種の案内、ニュースレター、シンポジウム要旨集、分類群情報のページを掲載する。今後、ニュースレターおよびホームページのサポートチームを編成してコンテンツを集める案を検討することになった。

d) 日本産生物種数調査：加盟学会にアンケートを取る案が考えられる。例えば、チェックリストが存在するか？、標準和名のリストがあるか？という点である。あるいは、節目になる年に再度調査を行うことも今後の課題である。

e) 日本タイプ標本データベース：今年度も科研費の申請が認められた場合には、加盟学会に配分する予定である。予算の大部分は人力委託費であり、旅費として利用可能な金額は限られている。

(4)2006年度予算：2006年度（2006年1月1日～12月31日）の予算案が示され、承認された。収入案は分担金\310,000、利息\10、広告料\50,000、前年度繰越金\938,315、合計\1,298,325。支出案はシンポジウム開催費\200,000、事務経費\50,000、ニュースレター編集費\50,000、国際動物命名規約日本語版出版費（特別会計）\300,000、予備費\698,325、合計\1,298,325である。

(5)その他

a) 加盟学会：現在の加盟学会は27学会。この数をもう少し増やせないかという要望があった。

b) 原生動物学会の講演会：原生動物学会の次回大会で開催される講演会について紹介があった。

(6) 来年の総会の日時：次回の総会は2007年1月6日（土）に開催される。

すきまCM(他学会の夏～秋季大会予定)

※詳細は各学会のホームページ等をご参照ください。

- 5月15～18日 日本地球惑星科学連合（葛張メッセ）
- 6月3～4日 植物地理分類学会（岐阜大学）・日本動物分類学会（東京海洋大学・品川キャンパス）
- 6月17～18日 日本熱帯生態学会（東京農工大学・府中キャンパス）
- 8月29～31日 日本進化学会（国立オリンピック記念青少年総合センター）
- 9月14～16日 日本植物学会（熊本大学）
- 9月15～18日 日本陸水学会（愛媛大学）
- 9月16～18日 日本昆虫学会（鹿児島市）
- 10月 日本植生学会

会費納入のお願い

種生物学会の年会費は、前納制です。2006年度の会費は一般会員12,000円、学生会員6,000円です。まだ納入されていない方は、お急ぎお振り込みいただきますようお願い申し上げます。2006年度までの未納金がある会員の方には、宛名ラベルの右下にも未納金額が数字で示してあります。

会費納付先 郵便振替番号 00880-6-148174

口座名義 種生物学会

お知らせ

種生物学会は、今夏に会長・副会長・地区幹事の選挙を予定しています。会員の皆様の積極的な投票をよろしくお願いします。

会員異動

住所変更・会費・入退会に関する問い合わせ
(2006年12月末まで)

会計 渡邊幹男

〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1
愛知教育大学生物

FAX 0566-26-2310, TEL 0566-26-2366
sasanabe@aecc.aichi-edu.ac.jp

種生物学会ニュースレター 32

発行 種生物学会

URL <http://sssb.ac.affrc.go.jp/>

編集 藤井伸二 (庶務)

〒444-3505 岡崎市本宿町上三本松6-2
人間環境大学・環境保全

Tel. (研究室): 090-5112-0491

Fax. (大学代表): 0564-48-7814

発行日 May 2006

印刷 (有)イヅミ印刷所

住所変更・会費・入退会に関するお問い合わせは、会計(上記)までお願いします。